

本好きの書庫利用法

教授 鈴木 幹 雄
(倫理学・フランス現代思想)

一郷正道さん(昨年退職された仏教学元教授)が、『書香』第23号に、『横川顕正遺稿集』の紹介をされている。文中の「横川文庫」という言葉に惹かれ、その『遺稿集』を求めて学内書店・文栄堂に相談をしてみたところ、非売品とのことで購入はできなかったが、結局、店主のご好意で借用させていただき、閲覧できた。

故横川教授は鈴木大拙に師事し、大谷大学で宗教学を担当して、特に神秘主義の研究に力を注いだが、36才で急逝された。後に遺族の方が蔵書を大学図書館に寄贈された。「横川文庫」は故教授の蔵書印であった。

わたしはかつて旧図書館(現至誠館)の書庫のなかを散策し、どんな書物が備えられているのか見て回って愉しんでいた。そして哲学史で書名しか知らなかったフランス語の文献が思いがけず多いことに気付いた。ラヴェッソンのアリストテレス論があり、ルナンの「キリスト教起源史」、ギュイヨー、レヴィ=ブリュールの諸著作がある。殊に神秘主義関連の文献が充実していると思った。ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』との関係で、また、ロマン・ロランの『インド研究』で紹介されていたラマクリシュナの神秘主義に少し関心のあったところだったので、その印象が強かったのであろう。特に、アンリ・ドラクロワの著作を発見して本当に驚いた。わたしには「横川文庫」という蔵書印は一九二〇年代にフランスで出版され、ここの図書館に収蔵されるにいたった書物のシンボルであった。

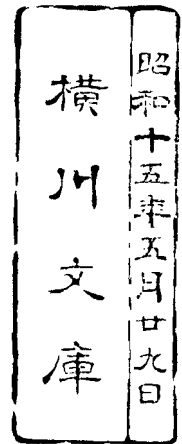
真理は時の娘という。一郷さんのお蔭で



やっと「横川文庫」の由来が分かり、図書館の蔵書の背後にある人と歴史が見え、大学の学問の歴史の一端を垣間見ることができた思いがする。いや、そういう物言いは正確でも正直でもないだろう。「横川文庫」とその他のフランス語文献は、同伴者もなくベルクソン哲学の研究を続けていたわたしにとって、小さくはない慰めであり、励ましであった。わたしと同じ関心をもった先覚がすでにここに居たのだと思うと、新入りのわたしを大谷



アンリ・ドラクロワ『LES GRANDS MYSTIQUES CHRÉTIENS』



横川顕正蔵書印

大学が温かく迎えてくれたように感じられた。

図書館で読みたい本に出会って、それを備えてくれた先人に共感と感謝をおぼえる。するとごく自然に、自分もまた将来の研究者のために読むに値する文献を用意しておいてあげなくてはならない、という考えが生まれてくる。しかしその義務に従うことはそれほどやさしいことではない。よい本がたくさんあるわけではないし、良書を見極めることもむずかしい。精々、研究分野の読みたい本を自分が買うついでに、購入希望図書に指定する程度のことである。幸い、洋書専門の至成堂書店が大学の隣にあるので、なにかと便利である。新刊書なら一冊は自分で、もう一冊は図書館へ、というわけである。だが、古書の場合はそうはいかない。至成堂では時々、得難い古書を入荷する。ある時、アルベール・チボーデの『LE BERGSONISME』(1923)を店頭で見付けた。日本語訳は昭和十八年に「上巻」だけでている。原書はある大学の図書館で見て、コピーはしたが、やはり欲しい。三十年近くを経てめぐってきたチャンスである。迷った末に、わたしは図書館で購入してもらうことにした。この書は、現在あまり読まれていない。多分、入手困難であり、古すぎるからかも知れない。しかしこれは、

ベルクソンに傾倒した同時代人による貴重な研究で、読むに値する文献なのである。これを私するわけにはいかない。将来、これを手にして喜んでくれる研究者が現われるだろうか。いや現われてほしい。それが選書する者のひそかな願いである。

とは云え、図書館のそういう貴重な書物をおおいに利用しているかという、そうでもない。わたしのように現代哲学の一分野を研究するものは、読むべき書物はほとんど自分で賄っている。わたしは外国語に弱いので、読むときには書込みや下線その他の符号を記して、いわば本を汚して使う。公のものを汚すわけにはいかないのである。それに残された時間はすでに少ない。家には読むべき書が堆く積まれ、埃をかぶっている。その一冊一冊が、人生のその時々わたしに関心を惹いた問題のいわば付箋なのだ。書棚を眺めながら、わたしはなんと多くの問題を未解決のままに、自分なりの決着をつけずに置き去りにしてきたことか、と恨めしくなる。とても図書館の蔵書を借りて読む余裕はないのである。しかし、書名を見て、人がどんなに多くこのことに興味をもち、探求をすすめているかを知ることはこころ嬉しい刺激である。目当ての書を求めて書庫に入る、そんな必要に駆られた探索でなく、散策気分で書棚を眺め、気ままに本を手にとって、人間の好奇心の多様性に驚いてわが狭いところを広く解き放つことも、図書館のひとつの利用法ではあるまいか。

(本文の校正中に、一郷さんから『横川頭正遺稿集』を贈っていただいた。いまでは、文栄堂で入手可能になったようである。)



アルベール・チボーデ
『LE BERGSONISME』